

シリーズ 私の一冊の本

経営情報学部 大平純彦 先生

深田久弥著 『日本百名山』

閲覧室 1 階 291.09/F71 新潮社 出版

夏休みをどのように過ごしたかゼミ生に聞くと、ドライブ旅行という答えが多く、登山と答える人はまれである。昔は山岳部やワングルに属さない普通の学生でもよく山に登ったものであるが、時代は大きく変わってしまったようである。深田久弥の『日本百名山』をすすめるのは、読書の楽しみとともに夏山登山の楽しさを知ってほしいからである。

深田久弥は「日本は山国である。どこへ行っても山の見えない所はない。市や町や村を見おろす形のいい山が立っていて、その学校の校歌に必ず詠みこまれるといった風である」と指摘し、「日本人の心の底にはいつも山があった」と書いている。それは文学的に誇張した表現であるが、私流に割り切れば、日本という国土に育ったからには、山（それに温泉を加えたいが）を楽しまないのはもったいないということである。

『日本百名山』は、深田久弥が「わが国の目ぼしい山にすべて登り、その中から百名山を選んでみよう」と思いつき、それを 20 年近くの歳月をかけて完成させ、東京オリンピックの年に刊行したものである。100 の山について、歴史的な考察、文学作品における記述の紹介、山行の記録などを織り交ぜて、その魅力がそれぞれ 2000 字ほどの簡潔なエッセイにまとめられている。たとえば、富士山について「この日本一の山について今さら何を言う必要がある」と文献の多いことの紹介から始め、「世界各国にはそれぞれ名山がある。しかし富士山ほど一国を代表し、国民の精神的資産となった山はほかにないだろう」という評価を与えている。

深田は、①山の品格、②山の歴史、③山の個性の 3 つの基準に、1500 メートル以上という標高に関する条件を加えて、全国の山から百名山を選定した。「麓から眺めるだけでは十分でない。…絶頂を踏まねば承知できなかった」とあるように、すべて山に登ったうえでの選定であり、その結果に「自信を持たせてくれたのは、五十年に近い私の登山歴である」と述べている。戦後の混乱した時期に百名山を選ぶのは大変な作業であったろうが、深田が選んだ百名山は、多くの人を納得させるものであった。百名山を対象とするガイドブックや地図が刊行されたり、百名山を紹介するテレビ番組が作られたり、百名山の登山記録を掲載するホームページが作られたり、現在においても深田による百名山は登山愛好者が登る山を決める際に決定的な影響を与えている。

静岡の山というと富士山をあげるのは自然なことである。だがその一方で静岡県と長野県、山梨県の県境が南アルプスの主稜線に重なり、南アルプスの南部が静岡市に属していることが十分に認識されていないのは残念なことである。実際、百名山のうち、間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳の 5 山が静岡市に属しており、穂高岳、槍ヶ岳などを有する松本市と並んで、静岡市は市町村レベルではもっとも多くの百名山を有する市となっているのである。深田は「二月のある晴れた日、私は静岡に行き、その海岸から遥かに南アルプスを眺めた。聖、赤石、荒川、悪沢などの雄峰が純白に輝いていて、その前に光岳があった」と書いているが、冬になると県立大学の正面からも白く輝く南アルプスの山々を目にすることができる。

南アルプスに登るには、新静岡から南アルプス登山線のバスで畑薙第一ダムまで、そこから東海フォレストのバスで樫島に向かい一泊。翌日、頑張れば、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳などの山頂からの雄大な眺めを堪能することができる。『日本百名山』を読んだ上で、地の利を生かし天気の良い日を選んで登ることをおすすめしたい。